東京都美術館ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No.475

start

輝くあの人とartの素敵な出発点

Interview

パンツェッタ・ジローラモ

PANZETTA Girolamo

ライフスタイル誌で渋くダンディな姿を披露したかと思えば、サービス精神旺盛なトークでTV番組を盛り上げ、実業家やエッセイストとしての顔も持つ、パンツェッタ・ジローラモさん。イタリアにいた少年時代からアートに親しんでいたというジローラモさんに、その魅力や楽しみ方についてうかがいました。

Panzetta Girolamo has many faces.
Appearing in lifestyle magazines as an elegant dandy,
he enlivens TV programs with his natural charm.
He is also a businessman and essayist.
We asked Girolamo, who has been familiar with
art since his childhood in Italy,
about its appeal and how to enjoy it.

生活の中に息づくアートの数々

東京都美術館には久しぶりに来ましたが、落ち着いた佇まいの中にモダンさが感じられる建物は、いつみても美しい。広々とした公園や歴史的建造物、文化施設が集結しているこの一帯は、何度でも来たくなる魅力があります。

僕は古典絵画も現代アートも好きで、日常生活の中にアートが息づいています。わが家の玄関では岡本太郎のオブジェが出迎えてくれるし、ソファに座った目線の高さには好きなアーティストの作品が並んでいます。お気に入りの絵画がプリントされたTシャツを着て出かければ、一日中ハッピー(笑)！こういったものは美術館で購入することが多いので、ミュージアムショップが充実しているかどうかは大きなポイントですね。

本物にはイマジネーションがかきたてられる

アートは僕の人生になくてはならないもの。無限の可能性を秘めていて、エネルギーをもらえるものです。来日した頃から家の近くの美術館に通っていますし、仕事で地方に行った時は現地の美術館に、また、母国イタリアや世界各地の美術館・博物館にも、チャンスがある限り足を運んでいます。本物に正面から向き合うと、イマジネーションがかきたてられます。そこにはアーティストの感情が残っていて、何らかの物語が存在するのです。この美しい女性は恋人なのか単なるモデルなのか。絵を完成させた時に告白するつもりだったのかもしれない。意味ありげな表情は何を表している？　本当に訴えたかったことは何なのか？——みればみるほど想像が膨らみます。どこからみても美しい銅像、生々しく際どい描写ながら目が離せなくなる絵、繊細で深みのある絵……全ての作品に作者が込めた思いがあるはずで、そのメッセージを感じ取りた

イタリア人として育まれてきたアートへの敬愛
モデルの仕事もファッションも
僕の感性の原点はアートにあります

I have an inbred respect for art as an Italian.
In modeling work or in fashion, art is the heart of my sensibilities.

パンツェッタ・ジローラモ
1962年生まれ。イタリア・ナポリ出身。実業家、モデル、エッセイスト。ナポリ建築大学在学中に亡き父親の後を継ぎ、歴史的建造物の修復に携わる。1988年より日本在住。イタリアと日本の文化交流に貢献した功績で2006年、本国より騎士の称号「カバリエレ～イタリア連帯の星勲章」を授与される。2014年、雑誌『LEON』の専属モデルとして「連続して最も多くライフスタイル誌の表紙を飾った数（男性モデル）」という記録名でギネス認定（現在も更新中）。近年は俳優業にも活動の幅を広げている。

い。そして簡単には答えが出ないその時間も楽しんでいます。

これは僕が受けてきたイタリアの美術教育に原点があるのかもしれません。小学生の頃から授業の一環として、先生と一緒に美術館や博物館を訪れていました。見学だけではなく、毎回レポートを書かなければならないのが面倒だったのですが（笑）。ただ、そのおかげで詳しくなったし、僕も含めイタリア人にとってアートは小さな頃から親しみ、尊び、誰もがそれなりに語ることができるものなのです。

イタリアにいた頃、歴史的建造物の修復に携わっていたのですが、建物の壁に描かれた絵画の保存・修繕は専門の職人が手掛けていました。どうすれば当時の姿のまま保存できるのか、職人はその絵を描いた人の気持ちまで理解しようとしていたし、できるだけ当時の色を再現しようと工夫を重ねていました。こういった職人たちのこだわりも、学生時代から育まれてきたアートへの敬愛の念があるからかもしれませんね。

同じ作品で違う感じ方をすることも

美術館には誰かと一緒に行くこともありますが、連れがいると楽しい反面、疲れていないか、もっと早く進みたいのではないか等、何かと気を使ってしまうので（笑）、自分のペースでみられるよう、一人で行くことが多いですね。

また、同じ作品でも配置の仕方や周りの環境、みるタイミングで違ったみえ方・感じ方をしたり、新たなインスピレーションが湧いたりするので、時を変え、場所を変え、何度もみに行きます。そうしているうちに以前は興味のなかった画家が好きになったりすることも。その一人がフリーダ・カーロで、歳を重ねてから好きになりました。いろいろな場所でフリーダの作品をみましたが、彼女の故郷であるメキシコでみた時が一番美しいと感じましたね。

作品だけでなく、好きな作家のルーツをたどるべく、生誕の地や実際に暮らした場所まで行ってみると、どんな景色をみて、どんな風に生きたのか、彼らが過ごした場所に流れる空

気にふれることで、アートへの理解も深まる気がします。そこまでできない時でも、一つの作品だけでなく全作品をみて、彼らの人生に寄り添いたいと思っています。

アートによって感性が研ぎ澄まされる

僕は、絵画や銅像はもちろん、写真や建物、家具、洋服など、人間が創り出すもの全てがアートだと思っています。そしてあらゆるアートから影響を受け、ひらめきを得ています。色の組み合わせ方、雰囲気の作り方、光を当てた時、角度を変えた時の変化、どうすればきれいにみえるか。これらはすべてアートから学びました。モデルの仕事ひとつとっても、カメラマンがどういう画を求めているか想像できるので、指示される前にポージングをするし、企画内容に合わせて自ら洋服を選んだりもします。

よく知人から洋服のコーディネートや色の組み合わせ方についてアドバイスを求められるのですが、そんな時こそ「美術館に行ってみて。たくさんアートをみるのが近道だよ」と伝えます。アートにふれればふれるほど、感性が研ぎ澄まされていきますから。本物をみる機会があればぜひ本物を、それが不可能ならレプリカでも画集でも、とにかくたくさんのアートをみることが何より大切だと思います。

この秋開催される「永遠の都ローマ展」では、僕も何度か訪れたことのあるローマ、カピトリーノ美術館の所蔵品が展示されるとあって、とても期待しています。銅像なのにまるで動き始めるのではないかと思えるような、生命力みなぎる青年の像や名画の数々に心を奪われた思い出があります。

日本で何百年も前のローマ人の生活、当時の風景などにふれられる機会なんてめったにないと思うので、今から楽しみですね！

start

Art is a living presence in my daily life. An object by Taro Okamoto greets me in the entrance of our house, and when I sit on the sofa, my favorite artists' works are displayed before me at eye level.
Your imagination gets aroused when you go to an art museum and see the real thing. You wonder, is this beautiful woman a lover or simply a model? What does her mysterious expression say? The more you look, the more your imagination goes to work. I want to feel the message the artist put into his work. I enjoy spending time at this, even when I can't get an easy answer.
I have been visiting art museums and natural history museums since I was in elementary school, when it was part of my classes and writing reports. For Italians, including me, art is something familiar that we respect from a young age; something that anyone is able to talk about in their own words.
I'm influenced by all kinds of art. I learned everything from art: how to combine colors, how to create an atmosphere, and how to make something beautiful. When an acquaintance asks me for advice on coordinating clothes, I tell them, "Go to a museum and see art." Seeing the real thing is best if you have the opportunity, but if you don't, even a replica or art book is good. Above all, it is important just to see a lot of art.
I hear that the "Rome, the Eternal City: Masterpieces from the Capitoline Museums' Collection" exhibition to run this fall will feature art and artifacts from the Capitoline Museums in Rome, which I have visited. It is not often that you can have contact in Japan with the lives of Romans centuries ago and scenery of that time, so I will be looking forward to it!

永遠の都ローマ展

Rome, the Eternal City:
Masterpieces from the Capitoline Museums' Collection

会期
2023年9月16日（土）～12月10日（日）

展覧会公式サイト
https://roma2023-24.jp

＊撮影場所：東京都美術館　＊2023年3月インタビュー

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。
今回は、「Creative Ageing ずっとび」の認知症の方を対象にした取り組みをご紹介します。

The Museum offers Art and Communication Project designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks.
This time we look at "Creative Ageing Zuttobi," a project for older adults including people with dementia.

認知症当事者とその家族を対象とした展覧会鑑賞プログラム

An exhibition-viewing program for people with dementia and their families

Creative Ageing ずっとび

現在、高齢者の4人に1人が認知症の当事者またはその傾向があると言われています。「Creative Ageing ずっとび」は医療・福祉従事者と協働し、認知症で美術館に行きづらいと感じている人も、安心して作品鑑賞や対話が楽しめる機会を作っています 。

Today, 1 in 4 older adults suffer from dementia or are in the preliminary stages. In collaboration with medical and welfare personnel, "Creative Ageing Zuttobi" offers people whose dementia makes museum visits difficult enjoyable opportunities to see artworks safely.

認知症の人とその家族が、アート・コミュニケータと、展覧会を鑑賞し、対話する。

People with dementia and their families see the art exhibition with art communicators and enjoy talking with them.

「Creative Ageing ずっとび」では、すべての人に開かれた「アートへの入口」を目指す当館のミッションを体現する取り組みとして、年齢を重ねると誰もが当事者になり得ると言われている認知症の方を対象にしたプログラムを実施しています。活動を始めた2021年度はコロナ禍のためオンラインでの作品鑑賞を企画しましたが、2022年度は美術館でのリアルな作品鑑賞や対話を楽しめる機会をつくることができました。

実際に認知症当事者とその家族の方が来館して参加できるプログラムを検討するにあたり、当館が立地する台東区の病院や地域包括支援センターの協力を得て、介護、医療、福祉の

「Creative Ageing ずっとび」とは?

What is "Creative Ageing Zuttobi"?

子どもから高齢者まで、歳を重ねても「ずっと」アートや美術館が身近にある社会を目指して、超高齢社会に対応する活動を行っています。シニアが美術館でアートと人と出会い、ウェルビーイングな場が生まれるように、参加型のプログラムを積極的に作っています。

To create a society where art and museums are "always" accessible to everyone from children to the elderly, even as they age, the Museum is working to meet the needs of super-aging society. We are actively creating participatory programs that enable older adults to enjoy art and people at the art museum, and cultivate a sense of well-being.

「オレンジカフェ　とびラーと楽しむ美術館めぐり
ーデンマーク家具の世界」の様子
東京都美術館「フィン・ユールとデンマークの椅子」(2022年)

Scene of "Orange Cafe Museum Tour with '*Tobira*'
- The World of Danish Furniture"
"Finn Juhl and Danish Chairs," Tokyo Metropolitan Art Museum (2022)

専門スタッフと一緒に、2つの企画を考えました。

一つ目は2022年9月6日に実施した「オレンジカフェ　とびラーと楽しむ美術館めぐりーデンマーク家具の世界」です。そのタイトルの通り、参加者と、とびらプロジェクト（※）で活動するアート・コミュニケータ（愛称：とびラー）が1対1のペアになり、美術館の散歩を楽しむという内容です。企画展「フィン・ユールとデンマークの椅子」（2022年7月23日～10月9日）の展示室を会場に、北欧・デンマークのデザイナー、フィン・ユールの作品とデンマーク家具を鑑賞しました。参加者は、家具の色や形、椅子の手すりの曲線に着目したり、使いやすさを想像したりしながら、作品の気になったポイントを自由に話してくれました。どのペアも話が盛り上がり、自宅で使っている家具のことや、子どもや孫の話題にまで、会話はどんどん広がりました。

※東京都美術館と東京藝術大学と市民とが協働し、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト　https://tobira-project.info/

二つ目の企画は2022年11月28日に実施した「ずっとび鑑賞会ー展覧会　岡本太郎」です。参加者はオレンジカフェの時と同じように、とびラーと一緒に「展覧会 岡本太郎」（2022年10月18日～12月28日）の展示室をゆっくり散歩しました。ずっとび鑑賞会ではそれに加えて、とびラーを含めて5～6人のグループで一つの作品を囲んで座り、じっくり作品を鑑賞しました。そして、作品から感じたことや、思い出したことを、相互に話し合いました。参加者の多くは、岡本太郎と同じ時代を生きてきたこともあり、作品を見ていると、次第に昔の思い出がよみがえってくるようでした。例えば代表作の一つ《重工業》を前に、参加者の一人は時間の制限もなく働かされていた記憶を話し、また別の一人は、終戦直後に大八車を押して、三日三晩かけて茨城から東京に戻った思い出を語りました。

二つの企画では、認知症当事者とその家族が、とびラーと一緒に、作品を介して日常とは少し違った時間を過ごし、新しい人との出会いや交流を楽しみました。今後もこのような機会を増やしていきたいと考えています。

（東京都美術館 学芸員　藤岡勇人）

「ずっとび鑑賞会ー展覧会 岡本太郎」の様子
岡本太郎《重工業》1949年 川崎市岡本太郎美術館蔵
東京都美術館 「展覧会 岡本太郎」（2022年）

Scene of “Zuttobi Art Appreciation Program – Okamoto Taro: A Retrospective”
Taro Okamoto, *Heavy Industry*, 1949,
Collection of Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki
“Okamoto Taro: A Retrospective,”
Tokyo Metropolitan Art Museum (2022)

In 2022 “Creative Ageing Zuttubi” held two programs, including a program enabling people with dementia and their families to enjoy art viewing and discussion at the Museum.
The first was the “Orange Cafe Museum Tour with ‘*Tobira*’ - The World of Danish Furniture” held in September 2022. Museum-based citizen art communicators (“*Tobira*”) paired up with participants for a walk through the Thematic Exhibition, “Finn Juhl and Danish Chairs” (Jul 23 – Oct 9, 2022). The second was “Zuttobi Art Appreciation Program – Okamoto Taro: A Retrospective” held in November 2022. After touring the galleries of “Okamoto Taro: A Retrospective” (Oct 18 - Dec 28, 2022), participants sat around an artwork in groups of 5 or 6 and discussed what they felt from it. Through their art encounters in the two programs, people with dementia and their families had experiences refreshingly different from their day-to-day activities, and could meet and interact with new people. We would like to increase such opportunities in the future.　(FUJIOKA Hayato, Curator, Learning and Public Projects)

活動の詳細はコチラ

「オレンジカフェ　とびラーと楽しむ美術館めぐりーデンマーク家具の世界」活動ブログ
“Orange Cafe Museum Tour with ‘*Tobira*’ - The World of Danish Furniture” Activity Blog

「ずっとび鑑賞会ー展覧会 岡本太郎」活動ブログ
“Zuttobi Art Appreciation Program – Okamoto Taro: A Retrospective”

『Creative Ageing ずっとび 2021.4→2023.3 活動報告書』
Creative Ageing ZUTTOBI Report, April 2021–March 2023

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

ギャラリーA・B・Cを会場に、7月22日(土)より企画展「うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈 展」を開催しています。幻想的な地下空間に広がる、こどもから大人まで楽しめる展覧会です。日常と非日常を行き来する鑑賞体験を通じて、自分の感覚や日々の暮らしを改めて見つめ直してみませんか。

A Thematic Exhibition "From the depths of Ueno, a story begins—Tamana Araki" will be held in Galleries A, B, C from July 22 (Sat). This time, we examine an exhibition enjoyable for both children and adults that will unfold in fantasy-like underground spaces. Through experiences of crossing the border between the ordinary and the extraordinary, visitors will have opportunity to look freshly at their senses and daily lives.

ちょっと怖くて懐かしい！夏にぴったりの不思議な展覧会の「はじまり、はじまり」！

Nostalgic and slightly spooky! "Hajimari, Hajimari!"
—A strange, wonderous exhibition perfect for summer

荒木珠奈(あらきたまな)さんは、版画や立体作品、インスタレーションなど、幅広い表現活動を続けている現代作家です。へんてこなかわいらしさとゾクッとする感覚が混ざり合った世界観がその魅力です。光と影、昔話、家や舟といった、物語を思い起こさせるようなモチーフを用いて、私たちの心の底にある懐かしい感覚や感情、記憶を揺さぶりながら、非日常の世界へと誘う作品を発表してきました。

繊細さと大胆さが掛け合わさったアンビバレントな魅力を持つ荒木さんの作品を語るときに欠かせないのはメキシコでの滞在経験です。20代でメキシコに留学し、「明るさと暗さ」「生と死」が共存する文化に魅了されたといいます。荒木さんがメキシコのお祭りの中で一番好きだと語る「死者の日」は、死者を偲び、ともに楽しく笑い、生きる喜びをわかち合う日であり、ユーモラスな骸骨やたくさんの蝋燭(ろうそく)が町中に飾られます。荒木さんはこうしたメキシコ文化を題材とした版画やそこに暮らす人々の逞しさをイメージしたインスタレーションなどを多く制作しています。また、先住民の人々との共同作品も制作してい

《NeNe Sol－末っ子の太陽－》試作版 2011年 作家蔵
NeNe Sol After a Mayan Myth (prototype), 2011,
Collection of the Artist
Photo:Jun Asano

《NeNe Sol－末っ子の太陽－》挿絵 2011年 作家蔵
NeNe Sol After a Mayan Myth (drawing), 2011,
Collection of the Artist

ます。例えば、2011年にはメキシコのチアパス州のマヤ系先住民を中心メンバーとする紙すき・版画・製本工房である「レニャテーロス工房」と絵本《NeNe Sol－末っ子の太陽－》を共同制作しました。チアパス地方に今も伝わる太陽創造神話を元に、マヤ先住民のシャーマンが現地語のツォツィル語でお話を語り、それを「レニャテーロス工房」の創立者である詩人が聞き書きし、表紙の原型となる彫刻をメキシコ人彫刻家が作り、ストーリーにあわせて荒木さんが挿絵を描きました。マヤの石の彫刻をモチーフにした表紙を開くと、主人公の少年やその家族、クモザル、アルマジロ、ホタルといった動物や昆虫が次々と登場し、全てが薄暗がりの中にあった世界に、光り輝く太陽が生まれていく物語がいきいきと描かれています。マヤ神話には長い歴史があり、マヤ先住民の人々のよりどころとして彼らが日常生活を豊かに紡ぐエネルギーとなっています。この神話を介した共同制作プロセスそのものが実験的な取り組みであり、プロセスを通じて現地の人々との豊かな関わり合いが育まれました。以上のようなメキシコとの出会いが、清濁あわせた人間の存在そのものを肯定するような荒木さんのまなざしにつながっているのです。

今回の展覧会では、地下空間全体を日常と非日常の境界を行き来する「不思議な旅」と見立て、荒木さんの作品世界を存分に味わえる構成としています。上記で紹介したメキシコを題材とした作品に加えて、開催地である「上野の記憶」に着想を得た本展のための大型インスタレーションの新作も展示します。物語性あふれる作品がもたらす本展の鑑賞体験を通じて、自分の感覚や感情、記憶をキャッチし、日々の暮らしのかけがえのなさ、生きていくことが持つポジティブな力を見つめ直す機会となれば幸いです。

（東京都美術館 アート・コミュニケーション係長 学芸員
熊谷香寿美）

うえののそこから「はじまり、はじまり」
荒木珠奈 展

□**会期**
2023年7月22日（土）～10月9日（月・祝）

□**展覧会公式ウェブサイト**
https://www.tobikan.jp/hajimarihajimari

"Hajimari, Hajimari!"—It's curtain time! for a nostalgic, slightly spooky exhibition enjoyable for both children and adults.
Contemporary artist Tamana Araki explores diverse expressive avenues ranging from print, three-dimensional work, and installation to participatory artworks and workshops. Araki's charm is her world view blending a wonky cuteness with spine-chilling sensations. Employing motifs evocative of light and shadow, folk tales, houses, and boats, she arouses nostalgic feelings, sensibilities, and memories deep within us, thereby luring us into an extraordinary world existing beyond our everyday lives.
When studying in Mexico in her twenties, Araki grew fascinated by a culture where "light and darkness" and "life and death" coexist. She has since produced numerous print works and installations on Mexican themes and created picture books in collaboration with indigenous Mayan people.
This exhibition will lead visitors on a strange and wondrous journey across the border between the ordinary and extraordinary in the Museum's underground spaces, fully immersing them in Araki's art world. In addition to displaying early and recent works, Araki will create a large-scale installation inspired by memories layered in the venue's site, "Ueno." The viewing experience will be an opportunity to catch your own sensations, emotions, and memories, and to reconsider the irreplaceability of daily life.

(KUMAGAI Kazumi, Curator,
Chief of Learning and Public Projects)

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約260団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。
美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックでご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is "the home of the public entry exhibition."
Each year, some 260 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

美術館と書のあゆみ

History of the Museum's association with Sho (the art of Japanese calligraphy)

旧館時代の展示風景 1973年8月撮影　東京都美術館アーカイブズ資料

Scene of Sho exhibition at the Original Art Museum. August 1973 photo, Tokyo Metropolitan Art Museum Archive

明治時代初期、書は絵画と同一のジャンルとして考えられ、明治10（1877）年から始まった内国勧業博覧会では、第2回まで美術部門の「書画」に分類されていました。しかし、西洋の美術概念が浸透し、書と絵画を別々のものとして見なすようになると、明治23年の第3回内国勧業博覧会で書と絵画は分けられ、最終的に明治36年の第5回で書は美術部門から外されました。また、学校教育で習字が必須科目となり、書が美術ではなく実用的なものとして位置づけられました。書が美術として認知されず、美術界から冷遇された状況のなか、書に対する認識を改め、広く普及させようと尽力したのが書家の豊道春海（ぶんどうしゅんかい）でした。

大正13（1924）年、豊道春海は書の評価を高めるため、日本書道作振会を結成し、翌年には上野の日本美術協会展示館（現上野の森美術館）で第1回展覧会を開催しました。展覧会を成功させ、第2回展覧会を構想した豊道春海は、東京府美術館（以下、府美術館、現：東京都美術館）での開催を熱望します。日本画

現代の展示風景［「第85回　謙慎書道会展」謙慎書道会（2023年3月開催）］

A contemporary Sho exhibition, “The Kensinn Shodokai Exhibition,” The Kensinn Shodokai (March 2023)

の横山大観や松林桂月、工芸の板谷波山らの賛同を得ますが、書を美術として認めない美術団体からの反対意見により、当初は開催することが困難な状況でした。そこで、豊道春海は府美術館設立を援助した佐藤慶太郎の賛助を得て、それを背景に大正15年11月に府美術館で初めて書道展を実現させました。

天井が高く西洋的な空間である府美術館での展示は、全紙や半切のようなサイズに加え、縦10尺（約3m）にも及ぶ長条幅など、作品の長大化をもたらしました。そして、広大な壁面を前提とする作品の制作が行われるようになったことで、書の表現に影響を及ぼすとともに、書道展の基盤の形成にもつながりました。

府美術館での展示が契機となり、現在まで各地の美術館で数多くの書道展が開催されてきました。東京都美術館でも、約80の団体が年間を通して展示を行っています。美術館で書が展示されるようになった歴史的背景を知っていただくと、今まで以上に書を楽しく鑑賞することができるのではないでしょうか。

（前 東京都美術館、現 東京都江戸東京博物館
学芸員　杉山哲司）

Until the early Meiji era (1868-1912), Sho (the art of Japanese calligraphy) was considered in the same genre as painting. With the permeation of Western art concepts, however, Sho came to be regarded as separate. Penmanship practice also became a compulsory subject in school education, which fostered awareness of Japanese calligraphy as a practical tool rather than an art. It was BUNDO Shunkai who worked hard to renew understanding of Sho and spread its popularity among people.
As part of his actions to elevate the reputation of Sho, Bundo aspired to hold an exhibition by his own Sho calligraphic association at the Tokyo Prefectural Art Museum. He initially faced difficulties, however, due to opposition by art groups that did not recognize Sho as an art. Bundo nevertheless obtained the support of SATO Keitaro, who had helped found the Prefectural Art Museum, and in November 1926, he realized the Museum's first exhibition of Sho works. That exhibition at the Tokyo Prefectural Art Museum laid the foundation for today's Sho exhibitions.
Learning the history of how Sho came to be exhibited in the art museum can enhance our enjoyment of the art of Japanese calligraphy even more.

(SUGIYAMA Satoshi, Curator)

美術情報室・
アーカイブズ

美術情報室は、図書・図録・雑誌などを閲覧できるライブラリー。
アーカイブズでは、館の歩みに関する資料を収集・整理・保存・公開しています。

A library open for perusal of reference books, catalogues, and magazines.
The Archives collect, preserve, and display materials documenting the museum's progress.

2022年度 アーカイブズ資料展示「公開制作の記録」

Archive Exhibition "The Record of the Public Creation Demonstration"

東京都美術館では毎年、当館所蔵のアーカイブズ資料展示を行っています。2022年度は、1970年代から90年代にかけて当館で実施された「公開制作」をテーマに、映像や写真資料を紹介しました（会期は2023年2月21日から3月19日まで）。

完成した作品だけを見せるのではなく、裏方の様子や制作過程を見せる方法として企画された「公開制作」では、おもに版画作家が講師として招かれ、来場者たちの目前で一連の工程を実演しました。当時としては画期的な試みともいえるこのプログラムは、作品収集活動において版画にも重点を置いてきた都美術館の収蔵品や企画展の理解を深める一助にもなりました。

会場では、1980年10月に実施された野田哲也さんによる木版画の公開制作の映像資料を中心に、石版画や銅版画の実演、また油彩画模写などの様子を記録した写真資料を展示しました。作家や観客のみなさんの熱気をも伝える当時の記録を通して、当館の活動を振り返る機会となりました。（東京都美術館 学芸員　小林明子）

The Tokyo Metropolitan Art Museum annually holds an Archives Exhibition of materials from the Museum's collection. The Archives Exhibition for fiscal 2022 (Feb 21 to Mar 19, 2023) displayed video and photographic materials documenting "public creation demonstrations" presented at the Museum from the 1970s to the 1990s.

"Public creation" was designed to show visitors not only completed artworks but the artists' behind-the-scenes production processes as well. Print artists were primarily invited as lecturers to demonstrate the stages of printmaking in front of visitors. Such public creation demonstrations, which in retrospect were ahead of their time, also helped deepen understanding of the collection and special exhibitions of the Tokyo Metropolitan Museum of Art, which assigned importance to print art in its acquisitions.

The exhibition this time featured video material documenting public creation of woodblock prints by NODA Tetsuya in October 1980, plus photo materials documenting demonstrations of lithograph and copperplate print-making and scenes of oil painting reproduction. The exhibition provided opportunity to retrospect the Museum's activities through records of that time fully conveying the enthusiasm of the artists and their audience.

(KOBAYASHI Akiko, Curator)

金曜の夜は美術館で楽しもう

Enjoy the Museum, late Friday evenings

週末の夜、みなさんはどのように過ごしていらっしゃいますか？ 同僚や友人との飲み会、恋人とのデート、家族でちょっと外食などなど…。今週も一週間頑張って、明日の朝はちょっと寝坊しても大丈夫。そんな夜は、心弾む素敵な時間を過ごしたいですよね。東京都美術館では特別展開催期間中の毎週金曜日、開館時間を延長して皆様のお越しをお待ちしております。日が落ちるとともに美術館はライトアップされて、昼間とは違った幻想的でスペシャルな空間に皆様を誘います。ライティングされた美術館は絶好の夜景スポット。SNS映え間違いなしです。入館無料ですので、お仕事帰りに展覧会をみる時間は無いという時でも、ミュージアムショップやレストランにちょっと立ち寄ってアートな気分を味わう、そんな美術館の楽しみ方はいかがでしょうか。もちろん展覧会の後に、鑑賞の余韻に浸りながらのディナータイムもおすすめです。レストランの大きな窓からの夜景もまた格別ですよ。夜間開館は、夜８時まで※。ショップ、レストランも８時まで営業です（入館およびレストランのラストオーダーは夜７時半まで※※）。金曜の夜は、東京都美術館で特別な時間をお過ごしください。

※夜間開館実施日および実施時間は変更になる場合があります。最新情報はHPでご確認ください。

※※１階レストラン サロンのラストオーダーは夜７時まで

（東京都美術館 管理係）

How do you spend your weekend evenings? The Tokyo Metropolitan Art Museum stays open late Friday evenings during Special Exhibitions. The Museum building is illuminated to give visitors a magical experience of its spaces quite different from during the day. Museum admission is free, so even if unable to see the exhibition, why not visit the Museum Shop or restaurants and enjoy the artistic atmosphere? Dining at our restaurants after viewing the exhibition is also recommended. Open Fridays during Special Exhibitions until 8:00 pm*. Shops and restaurants also remain open until 8:00 pm. (Museum last admission and restaurant last order: 7:30 pm**)

* Night extension days and hours are subject to change. Please confirm the latest information on our website.

** RESTAURANT Salon last order: 7:00 pm

(Management Section)

建林松鶴堂 上野本店 店長代行／薬剤師

田邊忠明さん

TANABE Tadaaki,
Tatebayashi Shokakudo Ueno Main Store,
Substitute manager/ Pharmacist

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界隈。今回は大正時代から続く老舗漢方薬局の薬剤師が上野の魅力を紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the mood of Tokyo's old downtown quarter.
This time, a pharmacist at a Kampo pharmacy dating from the Taisho era (1912-26) introduces us to the charms of Ueno Park and its surroundings.

上野本店では田邊忠明さん（左）、浦井菜摘さん（右）ら5人のスタッフがお客様一人ひとりにじっくりと向き合う。「ひとしきりお話をされた後、満足された様子で何も買わずに帰られる方もいらっしゃいます（笑）」

TANABE Tadaaki (left) and URAI Natsumi (right). The five-member staff gives close attention to each customer. "Some customers talk for a while then leave, looking thoroughly satisfied, without buying anything (laughter)."

歴史、芸術、買い物…いろいろな顔をもつ上野の“よろず健康相談室”として時を重ねています

Long service as a "local general health consultation center" in Ueno, a district with many faces: history, art, shopping...

大正8（1919）年創業のわが漢方薬局は、現社長の建林佳壮（たてばやしよしたけ）で4代目。1世紀にわたり日本人の体質に合うよう生薬を加減し、改良を重ねてまいりました。現在は国内外の方々から健康に関する相談を受け、地元のお客様にはとりわけごひいきにしていただいています。親子三代でご愛用くださる方、帰宅途中や昼休みに立ち寄っていかれる近隣にお勤めの方、相談内容も体質改善や軽い不調から持病・難病の真剣なご相談まで、実にさまざまです。

気軽に来ていただけるのは、積み重ねてきた漢方の知識・経験があるからだと自負していますが、商品を売り込むことに熱心でないことも理由の一つかもしれませんね。私どもが大事にしているのは、いかにその方が健康に幸せに暮らせるかであり、そのためのアドバイスがメインといっても過言ではありません。ですので、時間の許す限り病歴・薬歴、体質などをじっくりと伺います。その結果、漢方は必要ないと判断すれば生活習慣改善の助言で終わることもありますし、その方に必要な薬がドラッグストアなどで入手できる時には「〇〇で買ったほうが安いですよ」とお教えすることも（笑）。商売としてはアウトかもしれませんが、それでも長年うちの漢方薬をご

愛用くださる方は多く、お得意様の中には医師の方もいらっしゃるんですよ。

先日はニュージーランドから仕事で来日された方が、ご友人に当店の評判を聞いてくださったようで、「お酒を毎日飲んでいて…」と相談に来られました。肝臓への負担軽減効果の期待できる漢方についてお話した結果、山ほど買って帰られました。

私は横浜にいた高校時代から、友人らと連れ立ってたびたび上野に足を運んでいました。博物館や美術館など、たくさんの文化施設があり、買い物の場所にも事欠かないし、不忍池の散策は気晴らしにちょうどいい。海外の友人が来れば動物園や歴史的名所を一緒に楽しみます。

当店で働くようになって20年がたちますが、上野を知れば知るほど、住民の皆さんにはさっぱりとした江戸っ子気質の方が多いこと、そしてともに上野の街を盛り上げていこうとする仲間意識が強いことを実感しています。たとえば商売をしている者同士、店を行き来しても他愛ないおしゃべりや情報交換だけで終わることも多々あるようで、そういう皆さんをみているので、当店も商売に励むというより“街のよろず健康相談室”のようになっているのかもしれません。

アクセスの良さも大きな魅力で、徒歩圏内でいろいろな名所に行くことができます。私は店から浅草・雷門方面までぶらぶらと散歩するのが好きなのですが、料理人の友人につきあってかっぱ橋道具街まで足を伸ばし、専門店めぐりをすることも。少し長めのウォーキングにはなりますが、上野から浅草にかけては海外の方にもよく会えるので楽しいし、気分転換になります。

文化や芸術にふれたいとき、徒歩圏内でいろいろな場所に行きたいとき、そして健康の相談をしたいときにも（笑）、ぜひ上野に立ち寄ってくださいね。

創業者が大正時代に記した、薬の作用と漢方薬名。中国古来の名医や書物に由来した名前が多い

The action and names of medicines, recorded by the founder in the Taisho era. Many names derive from ancient Chinese physicians and manuscripts.

100種類を数える建林松鶴堂の漢方薬。日本人・現代人の体質に合うように、今なお研究を重ねている

Tatebayashi Shokakudo boasts 120 kinds of Kampo medicines. Research is still conducted to improve their suitability for Japanese people and contemporary lifestyle.

Our Kampo (traditional Chinese medicine) pharmacy has been improving Kampo formulas for decades to suit Japanese people's physical constitution. We are patronized largely by local customers, and the subject of our consultations varies from improving one's constitution to serious consultations on chronic and intractable diseases.

One reason people freely stop by our pharmacy may be that we are not concerned about selling products. After carefully listening to a customer describe their medical and drug history and constitution, we may simply advise them on lifestyle improvement, but many people, including some doctors, have relied on our Kampo medicines for years.

In the 20 years I have worked here, I have felt how Ueno residents still possess a refreshing Edokko (true Tokyoite) temperament. I have also encountered a strong camaraderie in their desire to enliven the Ueno district together. Different shop people, for example, visit each other's stores, often just to chat and exchange information. Seeing them makes me realize that our pharmacy too may be less a profit-seeking business and more a “local general health consultation center.”

Good access is another appealing aspect of Ueno. I often take walks to Asakusa and sometimes go to Kappabashi kitchenware town with cooking friends. If you want to experience culture and art, stroll around famous places easily walkable, or get consultation about your health, please drop by Ueno.

＊撮影場所：台東区東上野4-3-1 建林松鶴堂 上野本店　＊2023年3月インタビュー

あの日・あの時 Playback! TOBI

※東京都美術館は2026年に100周年を迎えます。

多くの美術家の作品発表と交流の場としての役割を果たしてきた東京都美術館では、1956年から7年にわたり、美術団体を世話人として、美術家と愛好家の親睦を深め美術の普及と発展を目指す「美術家祭」が開催されました。華やかに飾り付けられ、特設ステージの設けられた旧館彫塑室では、文部大臣等来賓者の祝辞や美術界の功労者の表彰などを含む式典が行われ、祝宴が始まると、団体有志による演芸やダンスパーティーなど、参加者たちが立場を越えて一丸となり年に一度のお祭を楽しみました。写真は第2回美術家祭で神輿と仮装行列が上野の街へ繰り出そうとするにぎやかな様子を伝えています。美術界が戦後の解放感にあふれた時代でした。

（米岡響子）

第2回美術家祭　1957年撮影

2nd Artist Festival, 1957 photo

For seven years from 1956, the Tokyo Metropolitan Art Museum held an “Artist Festival” with the aim of deepening friendships among artists and art enthusiasts and contributing to the popularity and development of art. In the sculpture hall of the original Museum building, a ceremony was held with congratulatory speeches by the Minister of Education and other guests and awards presentation to persons of merit in the art world. When the banquet began, participants all joined as one to celebrate the annual festival and enjoy performances and dance parties. (YONEOKA Kyoko)

東京都美術館ニュース No.475

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日　2023年7月31日

発行　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

企画・編集　東京都美術館 広報担当

デザイン　株式会社ファントムグラフィックス

翻訳　アムスタッツ　コミュニケーションズ

印刷　望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

＊最新情報は公式サイトでご確認ください

＊バックナンバーはこちら

東京都美術館

〒110-0007

東京都台東区上野公園8-36

Tel　03-3823-6921

Fax　03-3823-6920

公式サイト

https://www.tobikan.jp

Twitter

tobikan_jp

tobikan_en

Facebook

TokyoMetropolitanArtMuseum

表紙の作品

《ローマ教会の擬人像》12世紀　モザイク、象眼

ジョヴァンニ・バッラッコ古代彫刻美術館蔵

Mosaic depicting the Church of Rome, 12th century, mosaic, inlay,

Museo di Scultura di Giovanni Barracco

©Roma, Sovrintendenza Capitolina ai Beni Culturali / Archivio Fotografico del Museo Barracco

VEGETABLE OIL INK

FSC ミックス紙 FSC® C138625